

ファッションの源流から現代まで

飯能RC パスト会長
(株)マルナカ 代表取締役 中里昌平 会員

中山出席向上委員長からの依頼で、高麗神社での講演を再びと思ったのですが、ロータリーでファッションの話はないと考え直し、インシエーションスピーチ以来の、仕事の話をして頂きます。飯能は木材と織物のまちとして栄えておりましたが、時代の流れと共に双方の業界とも大きな変化を遂げ、特に織物業界は現在仲間が居ないという激変をたどりしました。

今、ウォータージェット織機は毎分2000回転を実現していますが、速ければ良い、たくさん出来れば良いという物は、もはや日本では通用しなくなりました。

昨年、古代エジプト(BC3500、BC5000?)カフラー王のピラミッドが3年振りに一般公開されました。この時代に織物があった事を証明するのがミイラを巻いた麻の織物で、世界最古の織物と言われています。

高松塚古墳壁画に描かれた女性の衣装が日本のファッションの源流ではないかと思えます。高麗郡建郡1300年には高麗神社を中心にイベントが繰り広げられ、古代衣装も再現されました。この地方の織物の起源については諸説あるようですが、移住してきた渡来人から織りの技術が伝承されたというのが一番確かなようです。

旧入間郡下には、絹織物の飯能織物組合と綿織物の所沢織物に組合員がそれぞれ150軒、計300軒以上あったと言われます。終戦直後は「ガチャマン」(織機が「ガチャン」と動けば「万」儲かる)とも言われましたが、現在ではかつての産地、秩父、蕨、浦和、川口を含めても、同業者は県内で10軒に満たない数まで激減しています。

子どもの頃は一帯が桑畑で、戦前までほとんどの農家が養蚕に携わっていました。生糸は外貨を稼ぐドル箱。蚕は「お子様」と呼ばれ大切に育てられました。秩父銘仙をはじめ、八高線沿線には絹関係の産地が数多くあり、江戸時代中期には「武州絹市」が立っていたという記録が残っています。日本の生糸産業の革新に決定的な役割を果たしたという理由で「富岡製糸場」が世界遺産に登録され、最近、国宝にも申請されました。S62年に閉鎖されましたが、明治5年、140年以上も前の建造物です。

この頃、私共の先祖も織物業を開始しました。多く織られたのは裏絹、「胴裏」と称した着物の裏地、「平織」「羽二重」です。飯能、毛呂、越生、小川、本庄、深谷。表地の高級品「大島紬」は、緋を中心とした「手織り」。本場、奄美大島には現在でも「泥染め」等、高級品として残っています。

埼玉県は「エンブroidャリー(刺繍)レース」で日本一を誇っておりましたが、現在一軒も残っていません。入間「平仙レース」、飯能「平岡レース」、川越「日清紡」、上尾「東邦レース」等。

織物産地は素材別に伝統と歴史をかたち作って参りました。桐生・足利・伊勢崎「両毛」、鶴岡・米沢、福井・金沢、丹後ちりめん、「甲州」富士吉田、(新潟)栃尾・見附。これらは全て絹からはじまり、現在では合成繊維中心。毛織物の(名古屋)「尾州」、綿織物の「遠州」浜松・三河・知多、綿の先染め織物としては世界一と言われた「播州」西脇。岡山はデニム産地。「近江麻」湖東、タオルの今治、生地綿布「泉州」、別珍・コル天「天竜社」と、日本中に点在した産地は全ての地



域で縮小されています。一昨年7月、40年以上も前の日米繊維交渉の外交文書が公開されました。日本は「米国の真意を見誤っていた」という事ですが復興遂げた日本は繊維製品で米国市場を席卷、対して米国は繊維貿易の自由化を迫ったのでした。[ドラマ『官僚たちの夏』映像]「ニクソンは佐藤首相を強く非難」等の報道がありましたが結局自由化し、「糸と縄の取引」「糸を売って縄を買った」と言われる。売った糸は「繊維の自由化」、買った縄は「沖縄の返還」でした。S46年の自由化の後、政府は業界の縮小を促し業界は衰退の一途をたどります。

しかし、一角にはファッション産業も含まれていました。他産地との協業を余儀なくされ、日本中の産地との交流の結果、あらゆる素材の生産が可能になりました。デザイナーからは「おたくには日本中の産地のものがありますね」とよく言われます。業界の激変の中で、婦人服地を中心にやって参りました。

[映像]織機の原型「いざり機(ばた)」。「高機(はた)」。沖縄「首里織」は国の補助で技術保存が図られてはいるが、手織りのため生産性が低く現在は工芸品の部類。豊田佐吉発明の半木製織機。30年程前までは毛は毛織機、綿は綿織機と素材別に決まっていた。手織りでも機械織りでも「飛び杼(ひ)」(シャトル)でタテ糸にヨコ糸を入れる。50年代、シャトルを使わない革新織機が次々に出現。エアジェット織機、ウォータージェット織機。毎秒33回転(毎分2000回転)で、糸は秒速100mで飛ぶ。水を使うため全ての繊維に使えるわけではないが合成繊維はもっぱらこの織機。生産性は高いが市場が要求する変化に富んだ織物は織れない。

その要求を満たすのが、ドイツ・ドルニエ社製レピア織機。この織機にこだわって設置を進めてきた。「レピア」(槍)でさまざまなタイプのヨコ糸を織る事が出来る。10cm程のヘッドに使われている特許は15種類程。工場が住宅地のまん中にあるため、当時、市の公害課に騒音測定等をお願いしてずいぶん気を遣いました。

タテ糸を準備する整経工程。ドラム円周は10m。タテ糸繋ぎの工程も自動機です。毎分400本の糸を繋ぐ。ドローイング(引通し)工程はスイス・ウスター社製ドローイングマシンで、綜統(そうじゆう)、ドロップ、箆(おき)と同時に毎分200本の糸を自動的に通す。30年程前、国内で4番目に導入。2人1組で12組24人の手作業でやっていた時の人件費の方が安かったように記憶しています。現在のマシンは2台目。ドローイングされた糸をドビー織機で織ります。ジャガード織は職人の世界でしたが、コンピュータ制御が出来るようになり、1999年から始めました。

東京スカイツリーはオープン満5年。制服は7種類あります。終わりに、オープン前の実況中継の映像をご覧頂きたいと思います。



◎日高RC清水会長
ご挨拶
◎日高RC石井実行
委員長ご挨拶
および御礼